

今週のメニュー

■トピックス

◇「調べてわかるプラスチック」を、福岡市の中学校理科教師研究会で配布・紹介しました。

社団法人プラスチック処理促進協会 神谷 卓司

■随想

◇マリ共和国旅行記（1）－マリ共和国ってどんな国－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

◇「調べてわかるプラスチック」を、福岡市の中学校理科教師研究会で配布・紹介しました。

社団法人プラスチック処理促進協会 神谷 卓司

H24年度から中学校1年生の理科でプラスチックを扱うことになり、各地で新しい教科書に沿った研究授業が行われています。今回、福岡市理科教育研究会から実験の指導とプラスチックについての講演依頼がありました。福岡市理科研究会は、東部・中部・西部の分科会に分かれており、VEC/一色部長が西部、神谷が中部の会場を訪問しました。私が担当した会場は、福岡市中心部の天神から南に6kmにある福岡市立横手中学校です。研究会のプログラムは、公開授業と検討会になっていて、約70名の理科教師が参加されました。（西部と中部合せて、福岡市の中学校理科教師の2/3 約140名が参加）

公開授業

身の回りではいろいろなプラスチックが使用されており、身近なPETボトルから繊維を作ることでのリサイクルの重要性にも関心を持たせることを目標にしたものでした。当協会からは、廃PETボトルから作られて、リサイクル原料として使用されているフレークと、そのフレークから綿菓子で繊維を作る実験装置を提供しました。生徒たちは、4から5名の班毎に実験に取り組みました。



公開授業：PET to 繊維

検討会

公開授業に対して、参加した先生方の意見や講評の後、プラスチックとリサイクルについて約40分講演しました。

参加者に、「調べてわかるプラスチック」と当協会の「プラスチックリサイクルの基礎知識」「プラスチックとリサイクル8つのはてな」「プラスチックとプラスチックのリサイクル（学習副読本）」を配布しました。



検討会

後日、参加された先生方からは、「プラスチックの再利用の促進が最も進んでいるのは日本と言うことが分かって誇らしくなった。なお一層、学校現場でプラスチックの知識や、リサイクルの精神を指導していきたい。」との感想が多数聞かれたそうです。「新しい内容であるプラスチック、さっと済ませば1時間で終わるものですが、こんなに奥が深いだなんて」と、今回の研究会で大変興味を持っていただくことができました。(了)

■ 随想

◇マリ共和国旅行記（1）－マリ共和国ってどんな国－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

今回より、今年9月に西アフリカ、「マリ共和国（Republic of Mali）」を訪問した旅行記をお送りいたします。

「マリ共和国」と聞いて、「ああ、あそこにある国だね」と分かる人はかなり少ないと思います。それもそのはず。外務省の在留邦人統計（2009年10月1日現在）によると、日本大使館の職員を除き、マリ共和国に3か月以上滞在している日本人は17人。

国内観光施設が発達しておらず、特に交通が道路状況や民族抗争に伴う安全確保の関係から非常に不安定なことを考慮すると、日本に限らず、旧宗主国のフランスでも旅行会社が主催するツアーが成立しにくい状況にあり、日本人は個人旅行者でもほとんど訪れる人がいない国でもあります。

位置的には西アフリカの奥側、国土の大半がサハラ砂漠という内陸の国です。ヨーロッパに面した地中海側から見ると、アルジェリアの下の方にあり、国土は旧宗主国フランスのほぼ倍、日本と比べると約3.3倍の広さがあります。海に面したところは全くない内陸の国で、最も大きな水源と言えるのはニジェール川です。

元はフランスの植民地で1960年9月22日に独立をしました。この旅行記を書いているのは2011年9月19日。間もなく独立記念日ですが、独立記念モニュメントに行っても、何かセレモニーをやるような雰囲気はありません。

人口は最新の2011年7月の調査（本文中、特に断りのない統計値は2011年7月調査のもの）によると14,159,904人。首都は「バマコ（Bamako）」。

当然のことながら日本から飛行機の直行便はありません。私は2011年9月7日から週1～2便（季節により異なる）運行を開始したベルギー航空でやって来ました。

ベルギー航空、バマコは経由地で、最終目的地はチョコレートの名前で有名なガーナの首都アクラ行き。マリ首都、バマコで降りたお客様はごく僅か。それも大半がマリの人たち。ヨーロッパから来る人もそれほど多くはなく、街中でも外国人の姿はあまり見かけません。



[クリックで拡大](#)

首都「バマコ」の人口は、調査時点が 2009 年とちょっと古いのですが、1,628,000 人。総人口の約 10%が集中しています。この数字から見ても分かるように急速な都市集中という現象は見られず、所謂スラムのような地区はありません。尤も、次回以降の旅行記でお送りしますが、首都と言っても衛生状態は決してよくはありません。

平均寿命は男女合わせた年齢で 52.61 歳と日本と比べ非常に短く、このため 65 歳以上の人の人口構成比は 3%しかありません。

出生率は非常に高く、1,000 人に対し 45.62 人。世界第 2 位の出生率です。確かに、街中に子供が多い。14 歳までの子供は総人口の 47.3%を占めています。

アフリカというと HIV(エイズ)のことを思い浮かべる方もおられるかもしれませんが、マリ共和国での感染率は 1% (世界で 47 位) とそれほど高くはありません。しかし、感染率は年々増加傾向を示しています。

人種は他のアフリカ諸国と同様、かなり多彩な民族構成で、かなり広い地域でいまでも民族抗争が続き、交渉を有利に進めるため外国人の誘拐も頻発しています。具体的な民族構成は、

- Mande 50% (実際には一つの民族ではなく、Mande Bambara, Malinke, Soninke という 3 つの民族からなる共同体—アライアンス—のようなものです)
- Peul 17%
- Voltaic 12%
- Songhai 6%
- Tuareg and Moor 10%
- その他 5%

主要言語は、民族構成でも一番多い Mande Bambara 族が話している Bambara 語が最も広範囲に通用しており、ほぼ 80%の人が使っているとされています。それ以外でも多くのアフリカの言語が使われており、一つの国で使われている言語の数では世界でもトップクラスと言われています。公用語はフランス語とされていますが、マリの人同士がフランス語で話しているのを見たことも聞いたこともありません (^_^);

宗教は世界遺産にも指定されている「トウンブクトウ (Tombouctou)」がサハラ砂漠以西のイスラム教伝播の中心地になっていたこともあり、

- イスラム教 90%
- キリスト教 (原始キリスト教も含む) 1%
- 地元宗教 9%

と圧倒的にイスラム教徒が占めています。とは言っても、イスラム教色はそれほど強くない、顔を隠している女性はほとんど見かけません。

また、スーパーに行くと、国産ビールや輸入ワインなどお酒も普通に売られています。ただ、さすがに豚肉 (ポーク) は売られていないようです。

最初の回は毎回、統計が中心になりますが、何となく「マリ共和国」のイメージが掴めましたでしょうか？

(つづく)

前回: [「リビア、ちょっと昔の話」\(その2\)](#)

■ 編集後記

先週は、幕張メッセで開催していた国際プラスチックフェアに出展し、立ち合いをしていました。

塩ビものづくりコンテストで入賞したものを全て展示しました。周りのブースにはプラスチックを成形するための機械が並ぶ中で珍しいのか、多くの方が足を止め、塩ビの新しい可能性を秘めた作品を眺めていました。様々な業種の方と意見交換が出来た有意義な展示会でした。

会期が5日間と長かったので足腰にきました。次回までに鍛えるようにします。(リマル)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp